見習いの習作

星野 雫(Elwing)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見習いの習作

【Ｎコード】
Ｎ０９３７Ｍ

【作者名】
星野　雫（Ｅｌｗｉｎｇ）

【あらすじ】
文学少女、見習いシリーズから拾ったお題で作った三題噺集です。『先輩のおやつ』と姉妹作って事になるのでしょうか。これは、心葉が、その後輩の日坂菜乃に対して出したお題で、元々の出典は、もしかしたら遠子先輩から出されたお題なのかも知れません。それでも、それまでには出ていなかったものなので、心葉が考えて、菜乃に出したもの、として別シリーズを起こすことにしました。　相変わらずの、ほんわかとした暖かい、ちょっと甘い、そんなお話を中心にしようかな、と思っています。

一応、お題を文学少女シリーズから持ってくるので、文学少女の二次創作に位置づけられるのかな？と考えています。
よろしければ、お読みいただき、感想、指摘など頂ければ幸いです。
よろしくお願いいたします。

見習いシリーズ、最終巻「見習いの、卒業」からのお題も追加しました。後は、また、おまけを一つ二つ考えようかな？なんて思ってます。

入学式、桜、プール（前書き）

これは、心葉が日坂菜乃に出した最初のお題です。まぁ、お話だから、というのはあるんでしょうけど、それでも、菜乃もしっかりとお題に応えて不思議なお話を創った様です。どうして、桜のゾンビなんて思い付くのかな…。あ、そう言えば、菜乃ってスプラッタ好きなんだっけ…。むー恐るべし。

で、私はゾンビは出てこない、普通の高校生のお話にしました。まぁ、特に変わった展開は無いですね…。まぁ、ほのぼの！という事で！

入学式、桜、プール

ぎらつく太陽の真下で、きらめく水しぶきを上げながら、僕とやつは競い合っている。

何を？と言うなら、直接は今度の大会での順位を。　そして、その結果によって、得る事になる告白の権利を。

五十メートルのターンで、ちらりと、となりのコースを見た時、やつはほぼ並んでいた。

「よし！」

心の中で、ガッツポーズをとる。僕は後半の追い上げが得意なタイプだ。

結果としては、僕が約二メートル差をつけての勝利だった。

「どうだ！」

「まだまだ！　大会では見てろよ！」

そんな事を言い合いながら、僕とやつは並んでプールから上がった。

やつとは幼馴染、とまでは行かないかも知れないけど、中学生の頃からの腐れ縁だ。シャワーを浴びて着替えると、一緒に自転車で下校する。　そして、途中のコンビニに寄って、それぞれ、思い思いの物を買ってほおばっていた。

この歳の男子が、目一杯練習した帰りに買い食いしないなんてありえなかった。　その時、やつがおにぎりをほおばりながら訊いてきた。

「なぁ、そういや、お前はいつからなんだ？　やっぱり入部の時か？」

その言葉に、夕焼け空を見上げながら、あの日の事、入学式の日の事を思い出した。

入学式の日、初めて登校する高校には不安があった。だから、校門の所で、見事に咲き、周囲に大量の花びらを舞い散らせる桜を見上げ、必死に心を落ち着けていた。
その時だった。
「うわあ。　きれぇ！」
突然、無邪気そうな声がして、ふとそちらを見た。　そこには、期待に瞳を輝かせる、そんな感じの女子が同じ桜を見上げていた。
それが彼女だった。
僕がいる事を、そして僕が彼女を見つめている事に気が付き、彼女が僕の方を見た。　どの程度の時間だったかはっきりとは覚えてないけど、その時、僕と彼女は確かにお互いの目を見詰め合っていた。　彼女は少し頬を染めていたと思う。
けど、すぐに、彼女は一緒に来た女子に呼ばれて、気が付いたようにぺこんとおじぎをすると僕から視線を外し、走り去っていった。
僕は身動きも出来ずに彼女を見送っていた。　そして思った。
『一目惚れって、本当にあるんだ』
入学式の間中、彼女はどこのクラスなのか、気になって気になって、でも、その日、彼女ともう一度会う事は出来なかった。

けど、再会はあっという間だった。
僕がやつと一緒に入部する為に水泳部を訪れた時、そこに彼女がいた。　天は僕に味方してる。そう確信したけど、僕が気が付かない内に、思わぬ敵が生まれていた。
その日の帰り、やつと自転車置き場まで行った時だった。
「俺、惚れちゃったぜ」
「え？　まさか？」
「おう。　今日、俺たちのすぐ前で入部届けを書いてたあの子、いいよなぁ」
「だ…　だめ！　だめだ！」

僕は思いっきり動揺した。
「何でだよ？　あ、もしかしてお前もか？」
あっさり見抜かれ、却って落ち着いた。
「え…、そ、そうだよ」
そして、その日、その場で僕たちは話し合い、そして協定を結んだ。

抜け駆けはしない。
夏の大会で、より上位を取った方が告白する権利を得る。

協定はその二つだった。

「そうか…。　まぁ、頑張ろうぜ」
「もちろん」
そんな風に言い合い、それぞれに食べ終えた僕たちはゴミを捨てると、そこで別れてそれぞれの家に帰った。

大会の日までは、まぁ大体はそんな毎日だった。
彼女も同じ水泳部なので、休憩の時などは、彼女の様子を遠目に見る事が出来た。彼女の方も、何人かの女子と一緒に一生懸命に練習している様だった。
もちろん、僕も、やつも、真剣に練習していた。

そして、とうとう迎えた大会当日。
僕も、やつも、当然の様に勝ちあがり、決勝レースを迎えていた。スタートの合図と同時に僕たちは水に飛び込む。やつは最高のスタートを切ったようだった。となりのコースでやつが少し先を行っているのが分かった。
五十メートルのターン、やつが明らかにリードしている。微妙な

距離。追いつけるか？
必死に前へ、前へ、ただひたすら足を動かし、手で水をかく。
ゴールした瞬間、どっちが先なのか、それは僕たち自身では判別できなかった。
だが、判定の結果はやつの勝ちだった。
「悪いな」
そう言い、やつは女子自由形で一位をかざった彼女の許へと走っていった。　僕は、黙って見送るしかなかった。

その結果を目の当たりにしたくなくて、僕はすぐに会場を後にした。

「ねぇ」
だが、シャワーを浴び、更衣室へ行こうとした時、聞き覚えのある声に呼びとめられた。
まさか？　そう思いながらも振り向くと彼女がいた。息を弾ませ、頬を染めた彼女が僕の目の前にいた。
そして、信じられない事を言った。

「あ、あのね…。　私たち、賭けをしていたの…」
「そ、それでね…。　一位の人が、こ、告白できるの。　だから…」

電卓、窓、カンガルー（前書き）

えー、電卓はどうなったのか、というと、全く判りません…。窓は、もうテキトーの極致の使い方だと思います。カンガルーは…。まぁ、状況を想像すると、笑っちゃうのは確かかもしれませんが…。

という訳で、三題噺としては、ちょっとダメかも…。　電卓、最初、もっと使う案もあったんですが、長さの都合もあって、やめちゃいました。まぁ、大した案じゃ無かったので…。

という訳で、ちょっと三題噺としてはアレで、お話としては裏設定が多くて判りにくいかもしれませんが、好きあってるのに、気が付かないニブチンの二人を、周囲が罠にはめる。そんなお話です。

電卓、窓、カンガルー

最近、私は遊園地によく行く。　デートだったら嬉しいけど、事務のバイトなので、出会いも無いし、単調な仕事だった。

遊園地の花畑では花がきれいに咲いていたけど、私は事務所に座り、電卓を叩いていた。

「それにしても、どうしてイマドキ電卓なの？　表計算ソフトないの？」

先週の様々な収支報告が書かれた紙が積み上げられていて、今、私ともう一人が、一生懸命に決算を計算している処だった。まぁ、彼もちょっといい男だったけど、残念ながら私の好みからは外れていた。

「あぁ、パソコン？　残念ながらないね。　それに、もしそんなものがあったら、僕たちの仕事がなくなるから、僕たちクビかもよ？」

「え！　それはダメ。　電卓ばんざい！」

私は慌てて前言を撤回し、電卓打ちに戻った。間違っても「電卓打ちがなくっても、ゲートでお客さんを出迎えるもん！」なんて言う勇気はなかった。

健康的な肌、と言えば聞こえはいいけれど、そんなに白くない肌。活発そう、そう言う人もいるかも知れないけど、どんなにケアしてもしっとりしない髪。　そして、高くない鼻筋…。

挙げだしたらキリがない…。

要は、よく言って人並み、決して美人とは言えない…。それは十分に自覚していた。

その時、電話がかかり「じゃ、後はよろしく」彼は突然そう言って、行ってしまった。

「はぁ…」

思わずため息が出た。
そして、そのまま、また窓の外を見る。私がいる事務所からは、入園ゲートとその周囲にある花畑がよく見えた。今日は平日で、入園者数は少なかった。
「え！」
私の視線は、たった今ゲートを通り抜けた、一組のカップルに釘付けになった。
「う…そ…」
私は自分の目を疑った。そこには、私の大好きな先輩が、見た事がない、けど、とてもきれいな女性と一緒に立っていた。私は窓に張り付くようにして、二人を見つめた。
そして、彼女はそんな私をあざ笑うかの様に、先輩の手を取り、二人は柔らかく笑い合うと、先輩は彼女に手を引かれるままに、歩み去って行った。
私は今見た光景が信じられなかった。いえ、信じたくなかった。
はっきりとした言葉はまだ聞いてないけど、それでも、先輩も私に好意を寄せてくれているんじゃないか？そんな希望を感じていたけれど、それは妄想だったのだろうか…。
何も判らず、動転した心をそのままに、着ぐるみを引っ張り出して急いで身に付け、カンガルーの頭を被り、電卓を持って事務所を飛び出した。
なぜ電卓を持って行ったかと言えば、ただ動転してたから、としか言い様がなかった。

電卓を持ったまま、着ぐるみを着て全力で二人を追いかけ、楽しそうに話し合っている二人から少し離れた木の陰から二人を見つめた。
けど、片手に事務用の大型電卓を持ったカンガルーが木の陰に身を潜める、というのは、まるっきりギャグで、しかもあまりに目立っていた。

つまり、当たり前だけど、私は二人に見つかってしまった。

「一緒に写真に写ってくれませんか～」

そう言いながら、先輩と一緒にいた彼女にガシッと抱きつかれた。その彼女を見ながら先輩が柔らかく微笑んでいるのを見て、ダメなんだ…、そう実感した。彼女の容姿がどうこうじゃなかった。彼女と一緒にいる時の、優しく暖かい雰囲気が、二人の絆を表していた。

「ほら、一緒に一緒に！」

そう言って、彼女が先輩を呼び寄せ、それに「はいはい」と苦笑しながら答えた先輩が私の脇に歩み寄った。

けど、気が付いた。何か様子がおかしい、何故か彼女は私を後ろから押さえ付けるかの様に抱きつき、身動きできなかった。　そうする内に彼女が

「じゃ、お願いしまーす」

そう言ったとき、私たちの目の前にカメラを持って現れたのは、さっきまで事務所で一緒に電卓を叩いていたバイトの人だった。

「え？」

そう思った次の瞬間、カンガルーの頭が外された。

その十分後、私は、お腹を抱えて笑い転げる彼女を目の前に先輩と並んで座っていた。

あのあと判った事は、彼女は先輩の妹で、バイトの彼とグルになって私と先輩は罠にはめられたらしいって事だった。

さきほど撮られた写真には、カンガルーの頭を外されて、電卓を持ったまま驚いている私と、何故かその私を見て頬を染めている先

輩が映されていた…。

「ねぇ、お兄ちゃん、この人、私とお兄ちゃんを恋人同士と勘違いして、カンガルーになりすまして追いかけて来たんだよ？」

そう言われて、頬を染めるしか出来ずに、俯いてしまった。

けど、ふと、となりの先輩を見上げると、何故かやはり頬を染めて、戸惑いを隠せない感じでちらちらと私を見ていた。

そこに、追い討ちをかける様に、悪戯っぽい笑顔で彼女が言った。

「で、お兄ちゃん。　いくらオクテだからって、まさか、この先を女の子に言わせるの？」

「え…」

リス、口紅、高速道路（前書き）

このお話、原作では『リスが魔法の口紅に乗って、高速道路で命がけのカーチェイスを…』という内容だという事でした。私は、というと、直前のカンガルーの彼女を持ってきてしまいました。そして、そのお話から時間を遡ること約一年。その前年の夏、サークルの夏合宿のときのお話です。別に自信があった訳じゃないけど、けど、だからこその数々のアタック。

それでも、やはり思い通りにはいかず、もう諦めかけた時…。

まぁ、結局はあいまいに終わってしまいますが、希望をもってもいいのかもしれない、そんな事を感じる瞬間でお話は終わります。

リス、口紅、高速道路

今、私は、先輩が運転する車に乗っていた。
サークルの合宿で、大学のセミナーハウスに行く所だった。私と先輩だけなら夢の様だったけど、私の他にも同い年の男子と女子が一人ずついて、助手席はもう一人の女子だった。
懸命に気持ちを盛り上げると、一生懸命、先輩に話しかけた。
「あの…、セミナーハウスってどんな所なんですか？」
「ちょっとした林の中にロッジが何棟かあって、結構いい感じなんだよ」
密かに心臓をバクバクさせながら、思い切って突っ込む。
「先輩と一緒のロッジだといいなぁ」
けど
「ははは。　残念ながら男と女は別々だよ」
軽くいなされ、助手席に座ったライバルには鼻で笑われてしまった…。
「えー」
懸命におどけて受け流しながら、心の中で拳を握る。く、くじけるもんか！

待ちに待ったサービスエリア。「こっからは私が助手席！」休憩中に改めて口紅を引きなおし「さぁ！」と勢い込んで、車に戻った。
「こっからは、あなたが助手席だったわよね」
そんなライバルの言葉に「えぇ」と頷きながら、余裕の表情で助手席に座った。
もちろん、心の中ではガッツポーズ。
けど、運転席に座ったのは、先輩じゃなかった。
心の中で「え！！」と叫びながら、何気ない振りを装って後ろを見ると、ライバルは余裕の笑みで先輩と話していた。

「は…、謀られた…」
心の中で血涙を流しながら、それでも、顔には笑顔を浮かべた。ちょっと引きつっちゃったかも知れないけど…。

「じゃ、そろそろ出発するよ」
先輩に換わって運転席に座った男子が笑顔で言うので、私も
「はーい」
と、元気よく答えた。
まぁ、ここで事を荒立てても私のイメージが下がるだけ・・・。それに、彼だってポイント的には決して低くはない。　けど、やっぱり先輩の方がイイ。
心の中で、そんな事を考えながら、彼ともそつなく会話をこなしていた。
どう？　私だって大人の女。このくらいの事は出来るのよ？　そう思うけど、それでも、先輩とライバルが楽しそうに話しているのを目にすると、目が釣りあがりそうになる。ああ、イケナイイケナイ。　平常心。平常心。
私がそんな事をしている間に、車は高速道路を降り、一般道をしばらく走り目的のセミナーハウスに到着した。

大方の予想通りではあったけど、到着までに先輩と仲良くなり、到着してからはいちゃつき倒す、という私のプランAは敢え無く廃案となった。
少しだけ落ち込んだけど、まだまだ。こんな事ではへこたれない。とにかく、作戦としては合宿中に先輩と仲良くなる。という次のプランに移行せざるを得なかった。それもダメなら、帰りの車で…。
でも大丈夫。プランは盛りだくさんだから。
テニスでボールを追って胸に飛び込むプランB、花火で驚いて抱きつくプランC、肝試しで怯えて抱きつくプランD、一緒に買出し

に行って仲良くなるプランE、そして究極は、夕焼けの中、二人でお散歩して好い雰囲気のプランF。
まだまだ、合宿は始まったばかり。　思わずニヤリとした。

けど、テニスでは先輩とは別の組となり、何も考えずに思いっきり遊んだ。先輩が「きみ、元気だね」と言うほどで、胸に飛び込むことは不可能だった。
続いての花火では先輩が一緒なのが嬉しくて、ついノリノリではしゃぎ倒してしまい、先輩は苦笑しながら、散らかした花火の後始末を手伝ってくれた
次こそは、と気合を入れた肝試しでは、とっさにお化け役の人を投げ飛ばしてしまい、先輩に抱きつくどころか「お手柔らかに…」と笑われてしまった…。
もう、私のプランは壊滅状態だった。
そして、もう、現実に当てにしていたプランとしては一緒に買出し、が残るのみだったけど、抽選の結果、私は買出し部隊から外れてしまい、万策尽きた。って感じだった。

夕焼けの中、一人グランドに出て溜息をついた。
「はぁ、ダメなのかなぁ…」
その時だった。
「やぁ、珍しく元気ないね」

「え？　せ、せんぱい！」
「きみ、ちょっと小柄で、いつも元気だから、リスみたいで、見てて楽しいのに」
「う…。　落ち着かなくてすみません…」
「い、いや、そういうの、可愛くて、い、いいと思う」
「え…」

思わず先輩を見上げた。夕焼けで周囲も真っ赤なので、私が真っ赤になっているのは、気が付かれないですむだろうか？
「あ…、いや…、だ…、だからね…」
突然しどろもどろになった先輩の頬が赤く感じるのは、やはり夕焼けのせいだろうか…。
でも…、も、もしかして……？　心臓がドクンと音を立てた…。

けど…。

「あーー。　先輩ー、探したんですよ！」
無情にも、買出しから帰ったみんなが、先輩を連れて行ってしまった。
それにしても、今、先輩は何を言おうとしていたのだろうか？

先輩が恥ずかしがりで超オクテだ、と言う事実を知るのは、まだまだ先だった。

跳び箱、ハイヒール、あさがお（前書き）

このお話から、見習いの第二巻です。原作中では、菜乃は『跳び箱くんとハイヒールちゃんは喧嘩が絶えない仲、そこにあさがおさんが仲裁に入り…』というお話、という事でした。喧嘩、私は、まぁ、例によって人間のお話ししか作れなくて、登場するのはフツーの人間です。そして、今回は喧嘩中から始まります。どうして喧嘩してるのでしょう？まぁ、喧嘩っていうか、彼女が一方的に怒ってる。って感じですけど…。

結局はホンワカかなぁ？なんて、でも、ちょっと途中の支離滅裂感（？）を感じていただければ、って感じです。

跳び箱、ハイヒール、あさがお

ユウウツだ…。ゆううつってどんな字だっけ？　確か、うつって書こうと思うだけでゆううつになりそうなくらいに難しい字だった覚えがあるけど。

いやいや、今は、そんな事はどうでもいい。

どうして私がこんなにユウウツかって言えば、彼と喧嘩中だからだ。

喧嘩の原因はなんだったっけ？　忘れちゃうくらいにつまらないことだ。けど、始まってしまった喧嘩だけが残ってる。

「は～。　どうして、こうなっちゃったんだろ…」

梅雨時、っていうのも一因だろうか？　季節のせいにするのは良くないけど、今、とにかく、気分は限りなく後ろ向きだった。

そして、それは彼の方にとっても悩みのタネなのは確かなようで、彼も仲直りのきっかけを探している様だった。　そして、そんな彼の提案で、半ば強引に連れ出された。

そして、久しぶりにショッピングモールに来ていた。

モールの華やいだ雰囲気にちょっと気が晴れたけど、やはり、彼と面と向かうのはまだ何だか悔しくて、ついツンケンしていた。

一通りのお店を見て回って、今はフードコートで軽く休憩してたけど、私は彼の顔を見ないようにしていた。

そんな私に、彼は突然訊いてきた。

「何がいい？」

「え？」　とっさの事で何のことかわからなかった。

「お前の誕生日プレゼントだよ」

「なに、もので釣る気？」

こんな事言いたくないのに…。

「そんなつもりじゃないけど…」

「じゃ、跳び箱」

あぁ、もう、私ったら何を言ってるんだろ…。

「はあ！？」

「家に跳び箱があったら良いと思わない？」

もはや、自分でも意味不明だ。難癖を付けているとしか思えない。

けど、こうなると自分でも中々止まらない…。理屈が通じない私は、もはや説得も不可能だ。

ごめんね、今日も仲直り失敗かな。　目の前で頭を抱える彼に心の中で謝った。

けど、彼はまだまだ食い下がった。

「くつは？　ほら、さっきの店にあったハイヒール。　あれ欲しそうだったじゃん」

「え？　いいの？」

思わず、身を乗り出してしまった。

ここぞ、とばかりに、彼も乗り出してくる。　しまった、釣り上げられたかも…。

「な？　な？　じゃ、も一回、見に行こうよ」

途端に彼の表情が明るくなる。単純なんだから…。　まぁ、そういうとこも好きだけど。

でも、今、私はハイヒールを欲しいとは思わなかった。

「行かない」

「え！　なんで？」

思い出してきた。今回の喧嘩の原因を思い出した。　そうだ、今回ばかりは彼が悪い。だから、まだ仲直りしてあげない。

まぁ、普段の私の行動にも原因はあるかも知れないけど…。

いやいや、そんな事はないはず、彼も当然気をつけるべき事のは

ず。

「私は、今、ハイヒールなんて欲しくないもん」

微妙に「今」という言葉を強調してみるけど、彼は「えー？」などと落ち込むばかりで、私の言葉の意味を探ろうとはしないみたい。

どうして気が付かないのかな？

私って朝は普通に二日酔いしてるような女なの？　違うでしょ？

そう。今回の喧嘩の原因は、私が昨日の朝、気分が悪くなって、ちょっともどしたのを見た彼が、あくびしながら「なんだ？二日酔いか？」などと言った事が原因だった。

確かに、これまで、たまあに、朝、二日酔いで苦しんでた事はあったかも知れない、確かに無かった訳じゃない。けど、ここ何ヶ月かはそんな事はなかったはずでしょ？

「あー！　わかんない！　俺、なにか言った？」

「そんなに怒らせるような、何を言ったんだ？　教えてくれ！」

とうとう、彼は降参したよう様だけど、そんなに簡単には教えてあげない。

「昨日よ」

「え？」

「昨日の朝」

「あぁ」

「ああ、じゃないわよ。　気持ち悪くてもどしてる私に向かって、なんていった？」

「え？　え…と…、　確か、二日酔いか？　って訊いたんだよな？」

「そうよ」

そう言いながら、ジロリと彼をにらみ付ける。　まだ、彼には何のことか分からないみたいで、しきりに首をかしげていた。

確かに、昔から、こういう事の察しの悪さはあったけれど…。

とその時、急にこみあげてくる嘔吐感に襲われた。
「う…」
急いでハンカチを口に当て、脇を向く。　やっぱり、間違いない…。

ふと、彼を見ると、心配そうに私を見ていた。　けど、突然、目を見開き「え？」そのまま私の目を覗き込み、もう一度「え？」そして、そのまま視線を私のお腹に移動させて…。
「あの…。　もしかして…　…？」
ようやく気付いたか…。
「遅いよ」
けど、次の瞬間には私は逃げ出したくなった。

「やったあ！！」

そう叫びだして、回り中の注目を集めて、恥ずかしくて恥ずかしくて…。

でも、まぁ、許してあげる事にした。
「あさがおでも買わない？」
「それならベランダでも育てられるし、　花言葉は『愛情の絆』よ？」

そうして私たちは、あさがおと、着実に育つ、私たちの絆を見守る日々が始まった。

エプロン、アザラシ、羅針盤（前書き）

このお話は、悩みました。そして、これで私としてベストなのかどうかは、ゼンゼン分かりません。難しいです。このお題。（難しいって言うより、苦手って感じかな）

原作では『男の子が願い事を叶える為に羅針盤を頼りに空翔ぶエプロンで旅に出て、そしてアザラシの姿をした神様に出会う、そして…』というお話でした。私としては、登場するのは人間です。でも、その設定も何だかぶれちゃったかなぁ…。アザラシはもう、結局意味不明でした。羅針盤もおざなりで、エプロンは…。これは最後まで出てきませんが、超意味不明って感じに…。一応コメディ路線のつもりですが、どうだろ…？

エプロン、アザラシ、羅針盤

私たちは今、羅針盤を持ち、その針が指し示す方向へ向けて車を走らせていた。
「あ、次の交差点を右みたい」
「了解」
私の合図で、彼はハンドルを切る。
「それにしても、相手を追いかける、探す為の道具が羅針盤ってのも怪しいよな…」
また彼が文句を言い出した。
「仕方が無いじゃない、そもそも私たち自体、今の世の中では怪しい存在じゃないの？」
「ま、それはそうかも知れないけど…」
私たちの何が怪しいかって言えば、まぁ、今、手にしている羅針盤はちょっと置いておけば、見た目として怪しい所は特に無い。とにかく、外見としては怪しいことはない。
まぁ、人の格好だから、好みとかはあるだろうし、人によってはおかしな格好だと言うかもしれないけど…。
じゃぁ、何が？　と言えば、私たちが魔法遣いだ、という事だった。
実は、現代にも、魔法遣いは結構いるのだ。
まぁでも、魔法遣いのローブというのは、この時代では怪しいかも知れない。

そして…。　そう、見た目に怪しい事が一つだけあった。
後席を振り返ると、そこではアザラシがじっとこちらを見ていた。
そのアザラシは、本当は人間のはずだった。敵対する魔法遣いたちに呪いをかけられてアザラシにされてしまったのだった。その呪いを解くためには、どのタイプの呪いなのか、少なくともそれが分

からないと戻せない。呪いをかけた本人に戻させるのが一番いい。
なので、私たちは、現場に残されていた魔法の痕跡を辿れる羅針盤を使い、急いで犯人を追ってきたのだった。

車は郊外に出て、周囲に建つ人工物はまばらになってきた。
「近いわ」
周囲を見ながら、慎重に羅針盤の針の動きを読む。車はスピードを落とし、慎重に周囲の様子を探る。
近い。きっと、もう見える範囲にあるはず。　そう思い、周囲を見渡す。針の指す方向に打ち捨てられた感じの工場跡があるのが見えた。
「あそこね」

工場を通り過ぎ、見えなくなるまで進んだ所で車を停め、私は車から降りた。
私と彼では、残念ながら圧倒的に私の方が強い。そして、強力な魔法での戦いになった場合、特に力が拮抗している様な場合は、助けにならないばかりか、足手まといだ。
だから、アザラシと彼には安全圏で待機してもらうことにしていた。
上着を脱ぎ、戦闘用のローブ姿になる。
幾多の呪文を織り込んだ糸を縒った布で作られたローブは、術者の魔法と同調させることで防御も攻撃も、一段とパワーアップする事が出来る。
そして、今、私が身につけているローブは、私たちの組織が代々受け付いてきた、最上級のローブだった。つまり、私は組織の中で最強の魔女として認められ、最上級のローブを受け継いでいるのだった。

意識を集中し、先ほどの廃工場の気配を読む。

自分の体が燐光を発し、夕闇の中で淡く、青白く光るのが感じられた。　そして、その状態で空気を伝い、光を伝い、そして闇を伝って廃工場の様子を探った。
工場の一角に人の気配と思われるオーラが漂っていた。　間違いない。
「じゃぁ、行ってくるわ」
そう言うと、夕闇の中をすべる様に走り出す。

相手に接近を気取られる前に一気に肉薄する。

バンッ

と扉を開けると、見たことの無いローブを纏った男が振り向いた。
仮面をつけているので、顔は分からないが、冷静さを保っている様だった。
「ちっ。　やはり貴様が出てきたか…」
「大人しく私たちの仲間を元に戻しなさい。　そうしないと…」
「そう思い通りに行くかな?」
不適な笑みを浮かべて、男が身構える。
けど、私は相手のペースに合わせる様な過ちは犯さなかった。
一挙動で突風を生み出すと、男に叩きつける。そのまま態勢を乱した男の後ろに回り、同時に仮面を剥ぎ取る。
「それ以上抵抗すると…」

「あ?」
「おまえは…」
そう、仮面の下から表れたのは、アザラシにされたはずの仲間の顔だった。

驚いて手が緩んだ一瞬の隙を突かれて、男に逃げられた。

「はん！　そんな恥ずかしい格好、よく出来るよな！」
「まさか、あなた…」

この事態は予測すべきだったのかも知れない…。
私たちの組織と、敵対する組織、信奉する教義は違うようで似ている。　だから、時として転向者が出ることがある。
「裏切ったの？」

「ふん。　なんとでも言え。　俺はもう、そんなメイドエプロンに興味は無い！」
そう言いながら、懐から写真を取り出し
「めがね、萌え～～！！」

男が叫ぶのと同時に、蹴りが顔面に炸裂し、男は倒れた。

メイド喫茶『魔法遣い』と甘味処『めがね腐女子』。　両者対立の根は深かった。

自転車、ハンカチ、ひな祭り（前書き）

これは、見習いシリーズから取ったお題ではないのですが、心葉くんが出したお題、という共通項からここに収録しました。挿話集1で心葉くんが遠子先輩に想いを寄せる牛園先輩に、その応援の為に、三題噺を書くことを教えようとして出したお題です。当時、既に芽生えていたはずの自分の気持ちに気が付いていたら、そんな事しなかったはずなのに…。

そして、このお題に対して、牛園先輩の作ったお話（？）は『ハンカチで、自転車つるりん、あとのひな祭り』訳がわかりませんが、この豪快さには見習うべき点があるかもしれません。それに、思わず吹き出してしまいます、コメディーとしては成立してる気がしますし…。

えと、前置きが長くなりました。　まぁ、私の作ったお話は、ちょっと昔を懐かしんで感傷的な気分になっている女の子の思い出話、というものです。　ちょっとベタかも知れませんが、まぁ、暖かな雰囲気、という事で…。　では…。

自転車、ハンカチ、ひな祭り

お兄ちゃんが自転車を買ってもらった頃、私はひな人形を買ってもらった。

それはもちろん七段の様に大きな物などではなく、五段ですらなく、三段のこじんまりとした物だった。けど、それで十分だった。

ひな祭りが近づくと、そう、大体は節分の豆まきが終わるとすぐ、ひな人形を出した。

お兄ちゃんかお父さんが、屋根裏にしまってあるおひな様の箱を取ってきて、私とお母さんが飾り壇を組み立て、ひな人形を並べていく。

一番上はお内裏様。お殿様とお姫様が仲良く並ぶ。二段目には三人官女が並び、お祝いのお酒の用意をしている。三段目は嫁入り道具だ。

飾り付けを終えて、ぼんぼりに灯りをともすと、ちょっと離れて正面から眺める。

一年ぶりのお内裏様が柔らかく微笑んでいる様に感じられた。

飾る場所は、いつも一階の和室だった。

居間の隣で、友達が来ると、大体はこの和室を使って遊んだり、一緒に勉強したりした。そんな場所に私のお雛様が飾ってあると、ちょっと得意な気分になった。

菱餅を並べたり、あられを乗せたりして、お友達と一緒にお雛様で遊んだりもした。

そして、みんなでそのあられを取って食べたりした。テーブルのお皿に盛ってあるあられと同じなのだけど、それを知ってもいるのだけど、それでも、おひな様のお道具に盛ったあられの味は違うように感じられた。

そう言えば、高校入試や、大学受験の時も、このおひな様の脇で勉強したような気がする。自分の部屋で勉強すればいいのに、居間の隣じゃ気が散るでしょ？　お母さんにはそうも言われたけれど、私はここが、おひな様の目の前で勉強すると集中できる様に感じた。

そんな時は、お母さんは「もう、ちゃんと集中しなさいよ？」そう言いながら、テレビのボリュームを絞ってくれた。

そして、時々そっと様子を窺っては、暖かいミルクティーなどを作ってくれた。

そんなお母さん、そして、やっぱり時折覗きに来るお父さんやお兄ちゃん。そんなみんなに見られてる、見張られてるって事があったかも知れない。それとも、すぐそばで見守ってくれている。その事に安心できたのかも知れない。もしかしたら、おひな様にも見守ってもらっていたのかも知れない。　とにかく、その場所、おひな様の前では集中する事が出来た。

だから、この場所ではいつも頑張れた。

立ち上がって、改めて気が付く。もう、この三段飾りをこんな角度からみてしまう大きさに成長していたんだ…。　まぁ、考えてみれば当たり前の事だった。だって、今はもう、私の身長はお母さんより高いのだから…。

まぁ、お母さんの身長を追い抜いたのは高校生の頃だから、何を今頃気が付いているのかって感じだけど。

よく考えてみれば、私はおひな様が出ていても、出ていなくても、よくこの部屋に居たような気がする。居間の続きで、大抵はお母さんがいたからだろうか？　居間のテレビが見たかったのかも知れな

いけど…。
夏になると、二階にある私の部屋は夜になっても熱気が満ちている感じで、蒸し暑かったので、自分の部屋には行きたくなかった。
それに比べ、庭に面した戸はよしずをかけ、網戸にしていたので、風が通るせいか、この和室は昼間から比較的涼しく、私はこの和室にいつまでも居座っていた様な気がする。

けど、もう、私がこの和室を一日中占拠する。なんて事はなくなるんだ。　今さら、ではあったけど、妙に後ろ髪を引かれる様な気がした。

今、お母さんはハンカチで目頭を押さえながら、私とおひな様を見比べていた。
「ここでおひな様を出すのも、もう最後ねぇ」
「そうね」
「持ってくかい？」
「無理よ…。　アパート、そんなに広くないわ？　それに、私一人じゃないんだから」
お母さんが苦笑しながら答える。
「そうだよねぇ。　しかし、早いもんだねぇ。　おひな様を買ったのは、ついこの間だと思ってたのに…」
「やあねぇ。　私、もう二十五よ？　それ何年前よ？　十年以上は前でしょ？」
「ふふ。　そうね。　道理で白髪が増えるわけだわ？」

おひな様をしまうのが遅れると嫁に行くのも遅れる。そんな根拠の無い噂を信じたかどうかは判らないけど、うちではひな祭りが終わると、すぐにおひな様をしまっていた。
私はどうしよう？　そんな根拠の無い迷信に振り回されるのは愚

かしい事だろうか？

何を考えているのか…。　まだ、赤ちゃんも出来てないのに…。

けど、改めて考えた。　やはり、私もおひな様は早くしまおう。

と。

ティースプーン、ダンスパーティー、アライグマ（前書き）

これは『見習いの、卒業』にあった、お題です。と言っても、これまでみたいに、はっきりとお題が示されていた訳じゃなくて、それでも、明らかにお題とわかる三つの言葉が示されていた。そんな状態でした。菜乃が作ったお話は、ティースプーンを魔法の杖と偽って、ダンスパーティのビンゴゲームの景品にしたアライグマ。そのアライグマの鼻がどんどん伸びて、大気圏を突破しちゃう。そんなお話だった様です。

私は、というと、アライグマになっちゃう魔法遣いの女の子のお話（？）です。いい加減な伏線と、そして、ご都合主義なラスト。えっへん。私の王道パターン（？？）です。

ティースプーン、ダンスパーティー、アライグマ

目を覚ましたとき、何となく違和感が在った。
「あぁ…。　また、やっちゃったかなぁ…」
そう言いながら、起き上がろうとしたけれど、やはり、人間の体と構造が違うようで、うまく起き上がる事が出来ない。　というより、そもそも、この体では二本足で立ち上がることは相当に難しくて、四つん這いで歩いていくべきなんだろうな…。　そう思った。
どうしてこんな事になっちゃたんだろう？
とにかく、お母さんのところに行かなくちゃ…。

そんな事を考えていたら、部屋のドアが開いて、お母さんが入ってきた。　お母さんと目が合う。　一瞬の間のあと、お母さんは苦笑して。
「あらまぁ、今度はアライグマね？」
そう言って微笑んだ。

ある日起きたら、アライグマになっていた。　そんな一大事に、なんでそんなに落ち着いているのかって？　それは、これが初めてじゃないから。流石に初めてのときは、お母さんも、私も、動転して、その動物が私なんだって判らなくて（まぁ、当たり前だよね？）、部屋から追い出されてしまった。　そして、公園で出会った野良犬と一緒に近所を歩き回った。
まぁ、元々脳天気なせいか、それとも二匹になって悲壮感が半減されたせいか、結構、のん気に遊んでしまった覚えがある。
その内、私の事に気が付いたお母さんが探しに来て、私は家に帰ることが出来た。
それ以来、私が時々動物になってしまう事が起きたけど、まぁ、制御の効かない魔法遣いとしては、許容範囲、という事だった。

そう、恥ずかしながら、私は魔法遣い。まだまだ修行中だけどね。

「それにしても、アライグマは久しぶりね？」
お母さんはそう言いながら、暴走した私の魔法を解いてくれた。

ぽんっ　と人間に戻った時、ポロリ、とパジャマからティースプーンが転げ出た。
そのスプーンを見て、私は心臓が跳ね上がった。
お母さんは、そんな私には気が付かなかったのか「じゃ、早くしなさいね」と言うと、そのまま部屋を出て行った。
そのティースプーンを見て、アライグマに変身してしまった理由が分かった。
実に単純なことだった。

昨日のダンスパーティで言われた言葉だ。「アライグマって可愛くて好きだな」憧れの先輩のそんな言葉のせいだ。いや、正確には、その先輩に可愛いと思って欲しい、そう思ってしまう私の気持ちのせいだけど…。
で、ミーハーな私は、そのパーティの時、何でもいいから、先輩が触ったものを何か欲しくて、先輩が使ったティースプーンを貰って来てしまったんだ。　そして、そのティースプーンを抱きかかえて眠ったんだ。　いい夢が見れるかな？なんて思いながら…。

確かに、いい夢だった様な気がする。
そうそう。その夢の中では、やっぱり私はアライグマになっていた。そして、部屋を抜け出して公園に行ったんだ。そして、無邪気に公園の池で遊んでた。
けど、遊んでたら突然、変な人たちが現れて、私を捕まえようとしたんだ。なんだか、ペットショップに売るとかそんな事を言って

た様な気がする。
私は必死に抵抗したけど、アライグマ程度じゃ、相手を怒らせる程度の反撃しか出来なくて、とうとう公園の一角に追い詰められてしまった。
その時、何となく見覚えのある犬が現れて、その人たちを追っ払ってくれたんだ。

助けてもらったのが嬉しくて、その後は、その犬と一緒に遊びまわった。
お月様がきれいで、なんだかロマンチックだなぁ、なんて思いながら、噴水に飛び込んだり、池を泳いだり、人間だったらとても出来ないような事をして遊んだ。
とっても楽しかった。　だから、別れ際に、花壇の花をちょっといただいて、花束を作ると、その犬にプレゼントした。
アライグマの手って意外と器用なんだよ？
その犬は嬉しそうに「ワン」と言うと、その花束を咥えて帰っていった。
なんでそんな事をしたのか、そんな事は分からない。
まぁ、アライグマだし、夢の中だし。　ね？

とにかく、そんな風に楽しい夢だった。
そんな風に、夢の事を思い返していたけれど…。

「早くしなさい！　遅刻するわよ！」
私の妄想を破って、お母さんの声が響いてきた。　いけない、いけない。
私は、素早く着替えると、カバンを掴んで部屋を飛び出した。そのまま「いってきまーす」と叫びながら、学校に向かった。
「遅刻するー」

そう叫びながら、必死に走っていく。

その途中、憧れの先輩を見付けた。

今日は朝からついてる！　そう思いながら、思い切って声を掛けた。

「先輩！　おはようございます！」

「やぁ、おはよう。　今日も元気だね」

先輩は、笑顔で応えてくれた。　ああ、やっぱり素敵だなぁ、なんて思ってたら、先輩は続けて信じられないような事を言った。

「アライグマ、変な人に捕まらなくて良かったね」

「え？」

何のことだろう？　そう思い、改めて先輩をよく見ると…。

先輩の胸ポケットには、夢の中で作った花束と良く似たものがささっていた。

「え？？」

あれは夢だったんじゃ…？

先輩が嬉しそうに…　　小さく「ワン」と言った。

手作り、いつかきっと、記念撮影（前書き）

これは、お題は私が勝手に設定したものです。心葉とななせが高校を卒業する間際、菜乃の素直さ、真っ直ぐさに敬意を表して。そして、ずっと心葉を見てすごした高校時代を振り返って苦笑しながら、でも最後は……。そんななせの視点で書きました。

ちょっと、お題は入ってるだけで、物語の展開には直接からんでない感じで、いまいちだったかなぁ……。

手作り、いつかきっと、記念撮影

彼女を見ていると、いつもちょっと羨ましかった。
真っ直ぐに、そして、素直に井上に向かっていく彼女の態度は、私にはまず出来ないことで、羨望のまなざしで見ていた。そして、井上はというと、そんな彼女に困っている感じはあったけど、でも、彼女とのやり取りは次第にとても自然になっていった。
私にもそうできたなら……。
出会った時に、もしくは、再会した時に……。
もし、そうだったのなら、私の望みは、想いは叶うことがあったのだろうか？

そう思わずにはいられなかった。
けど、私はそう出来なかった。友達に何度も背中を押されたけど、素直になれなかった。真っ直ぐにぶつかるどころか、照れくさくて、随分とつれなくしてしまった。いや、つれないなんてものじゃない。とんでもなくひねくれて、何度も言い掛かりをつけて突っかかった。
だから、井上には思いっきり誤解されてしまった。

それでも信じたかった。
いつか。
いつかきっと素直になれる。　素直にさえなれれば、私の想いは叶うかもしれない。
そう信じようとしていた。

けど、やっぱり初めから素直になっていた先輩には敵わなかったかもしれない。
うん。　そう、結局敵わなかった。

少しだけ希望を感じたときはあったけど、でも、それはやっぱり敵わない、ということを見せ付けられる結果に終わった。
天野先輩を恨むかって？　そんな訳が無い。
だって、私の大好きな井上を立ち直らせてくれた人だもの。　その間、私は何も知らず、何も出来ずに、ただ照れ隠しで当り散らしてただけだもの。恨むなんて罰が当たる。

まぁ、とは言っても、先輩はちょっと無茶だとも思う。
強引で、突拍子も無くて、とにかく普通じゃない。
ぺったんこで、手作りのお菓子だってまともに作れないし、突拍子も無くて、思い付いたらそのまま走り出すような人で、そのせいで井上を危険な目に遭わせたりした。それに、井上が嫌がることも強引にやらせてた。

けど。

確かに突拍子も無くて強引だけど。そのおかげで、私たちは随分と助けられていた。
井上が嫌がること、小説を書くことだって、結局は彼が自分で書くことを選んだんだ。
本当は書きたい、そう思っていることを彼女が実現させたんだ。
まぁ、ちょっと強引だったことは仕方が無いことだと思う。でも、結局、井上はそれがきっかけで立ち直った。
私ではあんなことは無理だった。
もう、そのことは素直に認めざるを得ない。

結局、私は井上が天野先輩が惹かれていくのを、ただ見ていることしか出来なかった。まぁ、誰にも止められないだろうけど。
あの二人は本当にお似合いだから。ちょっと自分に厳しすぎるん

で、見ていてもどかしいけど、それすらも二人の息はぴったり合ってる。
もう脱帽せざるを得ない。

確かに中学のときからの想いは叶わなかった。

でも、私は不幸じゃなかった。
井上も、不幸ではないみたいだ。　あの人と遠く離れてしまっているのに、言葉を交わすことも出来ないのに、でもとても落ち着いている。
きっと、お互いに信じてるんだ。　好きとか、嫌いとか、だけじゃない。それ以前に信じあってるんだ。なんて強いんだろう。うらやましいなあ。
だから、私もそうなろう。
井上を好きだった。　本当に好きだった。
悲しい思いもしたし、つらいこともあった。　でも、一緒に居る時間は嬉しかった。素直になれない時でさえ、一緒に居る間は嬉しかった。
そして、素直になれたときは、本当に嬉しかった。
井上と出会って、好きになって、色々なことがあった。色んな気持ちを抱えて苦しんだ。
ときめき。胸を焦がす想い。切ない不安。震えるほどの幸せ。
そして、痛みと悲しみ。
どれも、忘れることが出来ない大切な思い出だ。

私も井上も、もうすぐ卒業だ。
もう、一日の大半を一緒に過ごせる様な、そんな夢の様な時間は終わりだ。だから、せめて写真の一枚でも、記念撮影を。
少し前まではそう思ってたけど、もうどちらでもいい。

写真なんかなくても、私の中には井上がいる。
やっと本当に素直になれた私に、柔らかな笑顔を向けてくれた。
好きだとも言ってくれた。もう、その『好き』が恋人のそれじゃないことは知っている。それでも十分だ。
素直に、まっすぐにぶつかることが出来た。
私の中にはずっと井上の笑顔がある。それはもう、私の一部なんだと思う。他にも井上と一緒に感じたもの、私が一人で感じたもの。喜びだけじゃなく、痛みすらも、私の一部だと思う。だから、どれも消えることはないだろう。けど次第に感じが変わっていくかもしれない。そう。思い出すたびに、優しい思い出になっていく様な気がする。

そして……。
そしていつか、井上じゃない誰かに恋をするかもしれない。
だからって、井上に抱いた想いはなくならない。そんな想いも何もかも、その全てを抱えたまま、私は新しい恋をするんだから。
それは、もっと激しい恋かもしれない。　そう思うと、ちょっとわくわくする。
そんな気持ちになれる、そんな私が好きだ。
そう、私は、やっと私を好きになれた。

これだけは、はっきりと言える。

ありがとう。　私、井上を好きになってよかった

放課後、菜の花、前向き（前書き）

このお題も私が勝手に設定したものです。ななせの視点で書いたものと、ほぼ同じ想いを、でもちょっと違う想いと視点で。日阪菜乃の視点で書いてみました。心葉を好きで、でもそれが叶わないことはほぼ判ってる。でも、まだ諦めることはできない。もっと、思い切り、まだ自分の全てをぶつけてない。だから諦めるのはまだ。

少し頑固。まだ、他の恋の可能性は考えたくない。ほぼゼロ、でも完全にゼロじゃない可能性をもう少しだけ追いかけたい。

でも、それは可能性がゼロだと納得するための儀式みたいなもの。そうしないと、自分を説得できないから。みたいなつもりもあるかなあ？

放課後、菜の花、前向き

この一年間ほど、放課後が待ち遠しかったことはないと思う。
どうしてって、大好きな先輩に会えるから。　毎日、終業の鐘が鳴ると同時に鞄を掴んで走り出した。もちろん、先輩に薦められた小説を大事に抱えて。　ちゃんと読んでるつもりだけど、部室では同じ小説を呼んで感想を話し合ってるはずなのに、どうしてか、私と先輩の会話はまるでかみ合ってない様に感じられた。
どこがそんなに感動する内容なのか、よく判らなくて、徹夜で何度も何度も読み返して、夜も明けるころ、もしかして、ここかな？
なんて思えたときは、もう飛び上がって喜びたい気持ちでいっぱいになった。別に、徹夜明けでハイになってた訳じゃないと思う。
あぁ、でも、先輩に一歩近付けたような気がしてハイになってたのかもしれない。
でも、そんな思いはこてんぱんに打ち砕かれることもあった。だって、私の感じた感想と、先輩の感じたことはまるで違ってたりしたから。　先輩は優しく「そうか、日阪さんはそう思ったんだね」なんて言われてしまうと、うまく言葉が出てこなくなってしまった。

時として、近付いたと思う距離以上に、先輩が離れて行ってる様に感じることがあった。もちろん、先輩が私から逃げ出してるって訳じゃないはず。
あ、もしかしたら、私から逃げようとしたことはあったかも知れない。
それは、私が強引にキスしたとき。　あれは、仕方ないよね？
だって、私としてもそれ以外にどうしようもなかったんだもん。
好きで、好きで、とにかく大好きで、それなのに、私のことなんか眼中に入らない振りをして。
だから、はっきりと告白して、強引にキスした。

まぁ、今となっては、どうしてあんな大胆なことが出来たのか、自分がやったことだけど信じられないくらいで、思い返すと顔から火が出そうになるけど……。

でも、決して後悔はしてない。　何度だって告白する。

でも、先輩ったらひどい。

すごく勇気を出したのに、やっとの思いで告白したのに。そんな女の子に向かって「僕はきみが、大嫌いだ」だなんて、ちょっとひどいと思う。

まぁ、色々と厄介ごとを起こしたり、巻き込まれたりして、そこに先輩も巻き込んだりしたから、迷惑がられてたのかもしれないけど……。

そして、決心したんだもの。

この恋を絶対に諦めないって。

でも、先輩は私なんか見てなかった。

それも知っていた。

先輩が恋してる人の姿を見たことはないけれど、その姿を追って、叫んでいた先輩をみたことがある。盗み読んだ、先輩の書いた小説からすると、きっと花にたとえるとスミレの花のイメージに重なる様な人だったんだと思う。

私自身は断然菜の花だと思う。

それは、名前が菜乃だから、ってこともあるけれど、だって、菜の花畑にいっぱいに菜の花が揺れてる光景って、とっても元気になれるでしょ？

え？　自分で自分を花にたとえるなんてあつかましいって？　へへ。でも、私は菜の花。私を見て、元気になってもらえたらとっても嬉しい。

それに、元気が私のとりえなんだから。　そこはゆずりたくない。

最近、その人を描いた絵を見せてもらった。

スミレの花ってイメージは確かにあった。透き通るような感じで、長い、まっすぐな黒髪が素敵で、とても優しい笑顔だった。思わずため息を突いた。

私じゃあ、あんな風に描いてもらうことは出来ない。

けど。

そんなイメージ通りだけじゃないってことを、私は知っていた。

大勢の人に話を聞くと、どうやら、決してか弱いスミレなんかじゃなかったみたい。相当に元気な人だったらしい。人のことを放って置けなくて、先輩を連れまわしては、様々な事件に首を突っ込んで、かなり危ない目に遭ったこともあるらしい。

そういう方面でもちょっとした有名人だったらしい。

ちょっと意外だった。

でも。　その人だって、実はすごく元気な人だった。

つまり、先輩は元気な人は嫌いじゃない。いえ、むしろ好きなはず。

だから、私はまだまだあきらめない。

どうしてって好きだから。

その想いに正直に、当たって、当たって、何度も当たって、そして何度砕けても、それでもまた当たりたい。

それに、卒業する間際、確かに言ってくれたんだよ？

「好きです」

って！

確かに、その好きと私が先輩を好きな気持ちはちょっと違うものなのは知ってる。決して、私と付き合いたいとか、そんなことを意味してる訳じゃないことは分かる。
でもでも、最初なんか「嫌いだ」って言われてたんだよ？　すごい進歩だと思わない？

だから、まだ諦めない。
今のまま、今の前向きのまま。　まだ諦めない。
可能性はゼロに近いかもしれない。　でもゼロじゃない。
そして、もし、想いがどうしても叶わない。そう納得できたら。
そしたら、ちょっと泣いて、また前向きに進みだそう。　その時は、私が見る方向はちょっと違うかもしれない。
けど、前に向かって進む。それは変えたくない。

とにかく私は自分の気持ちに正直に進みたい。

だから今は、大きな声で言おう。
「先輩、好きです」

放課後、菜の花、前向き（後書き）

とりあえず、見習いの習作はこのお話でおしまいとします。なんだか、とって付けたようなお話になってしまってるかもしれません。最後の２つはあまり変わり映えもしませんしね。

あはは。それではまたー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0937m/

見習いの習作

2011年10月29日01時20分発行